

4. 塩飽エトセトラ

山の会の名前をとった塩飽諸島の「塩飽」とは、海底の複雑な地形から発生する湧昇流の「潮湧く」もしくは、弥生時代には生産されていた藻塩の「塩焼く」から転じたと考えられています。塩飽の存在を不動のものにしたのは塩飽水軍です。水軍が持つ造船と操船の技術は卓越しておりました。塩飽水軍は、「主家に仕える」と言う武士的な武門意識に薄く、常に時の最高権力者である足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と主君を替えて生き残りました。特に秀吉からは、塩飽1250石を自主管理することが認められ、大名領ではなく人名（にんみょう）という組織が生まれ江戸時代も続きました。

高松藩や丸亀藩、多度津藩とは違う生活圏が今日まで独特な文化や風俗をとどめることとなりました。そのいくつかを紹介します。

◆『碁石茶の茶粥』のルーツ

塩飽諸島の粟島・志々島・高見島・佐柳島・岩黒島には今も『碁石茶を使った茶がゆ』の文化が残っております。碁石茶での茶粥を食べる習慣の起りは、田んぼが無くて米の採れない塩飽の島々で魚を売って手に入れる貴重品の米を「食い延ばす」ために粥にしました。飯時には具だくさんの茶粥をかき込み仕事に精を出しておりました。中身の米はわずかししか入れて



碁石茶

ないため1日4回の茶粥でもすぐお腹がすいたそうです。水道が無い時代でしたので塩分を含んだ井戸水は一般的なお粥には向かなかつたらしく試行錯誤の末に碁石茶を煮出すやり方に落ち着いたそうです。今でも毎日のように碁石茶の茶粥を食べている人は、水道水で食べるより昔の井戸水で作った方が美味しかったと言われます。後日、塩飽諸島の佐柳島で碁石茶の「茶粥の接待」を受けた時、お茶を多目にした淡い茶色の粥がで

碁石茶とは蒸した茶葉をムシロにかけて寝かし、さらに樽につけ込む山深い大豊町に古くから伝わる世界でも珍しい二段発酵茶です。並べて天日干しする様が碁石に見えることから碁石茶と呼ばれるそうです。ルーツは中国雲南省に住む少数民族の布郎（プーラン）族が作っていた酸茶が製法の原理では同じでありミャンマーを含み中国雲南省西双版纳付近とされています。味は、乳酸菌や酵素が豊富で甘酸っぱい香りと風味から私は京都の“すぐき漬け”を思い出します。

てきました。調味料を入れないため、かなり薄味ではありますがクセはそれほど感じなく、さらさらした食感で碁石茶の独特の風味がして食べやすかったです。

高知県の大豊で作られた碁石茶が塩飽諸島に伝わったのは土佐藩が参勤交代の時に詫間港を使っていたので、ここから庄内半島の東側に位置する塩飽諸島の粟島、志々島、高見島、佐柳島、広島そして岩黒島（1797年に佐柳島から7人が移り住んで開墾した島）に伝わったと推察します。

◆伊勢大神楽が塩飽諸島に舞う

毎年、8月から9月頃になると塩飽諸島に伊勢大神楽の森本忠太夫一行がやってきます。半紙が貼られた家々に軽快な笛が先頭になって右手に鈴、左手に御幣（ごへい）を持った獅子舞が続いてきます。神楽は、各家々で「籠払い」「悪魔払い」を行って最後に島の中心地で獅子舞と放下芸（ほうかげい：曲芸）を演じて1年に1度の行事が終わります。演目は、昔よ



四方の舞

四方の舞

り決まっています。16あります。「舞」とつくのは獅子舞で「曲」とつくのは放下芸です。獅子舞は、獅子頭に付けている紙の毛が幣(ぬさ)とよばれ神職が用いる祓い幣を意味するため獅子頭を舞わすことが、祓い清め(お祓い)にあたると考えられています。したがって、獅子舞は「お祓い」の式であり、これを『神楽』と呼んでいます。放下芸は、現代では寄席で見ることができるものもあります。例えば「傘の曲」は、から傘の上で手鞠、茶碗、マス、小銭などを回すおなじみの芸です。また、舞と曲の間にはチャリと呼ばれる道化師がおもしろおかしく話をして聴衆を和ませるこれも現代では漫才にあたるのでは思えます。

伊勢大神楽は、本拠地を三重県桑名市太夫と四日市市東阿倉川とし、西日本を中心に昔より決められた各太夫が持っている檀那場(だんなば)を6組の太夫が1月から12月まで1年かけて廻りその際いただく初穂料(お布施に相当する物)で生活しています。昭和56年には「特に放下の芸系を遺す演目は、芸能史的に貴重であり、獅子による曲芸という芸態にも特色があると認められる。」との理由によって



剣三番叟

国の重要無形民族文化財の指定を受けました。

四国では香川県のそれも塩飽諸島の櫃石島、岩黒島、与島、瀬居島、牛島、本島、広島と津山藩だった小豆島のみまわってきます。一座を率いる森本忠太夫の話では、江戸時代には藩によっては入れてくれない所もあって、檀那場ができなかったそうです。近年は、塩飽諸島の島出身者の要望により坂出市西ノ庄町と丸亀市飯山町の個人宅にも廻るようになったそうです。



クライマックスの早変わり

◆お接待の白い餅・赤い餅

お接待とは、巡礼をする人を接待する行為をいいます。観音さまを巡礼する人は「お大師さまと同じ」または「仏様と同じ」として扱われます。今は、お接待の行事を目にすることは珍しいですが、塩飽諸島のいくつかの島では春にお接待を行っております。各島の開催日が重ならないように土日に関係なく毎年同じ日に開催されることが決められています。



7つの地蔵の観音堂

与島のお接待を紹介します。島では、毎年4月18日に真言宗・法輪寺を中心として島三十三観音を巡礼する人たちに地元の方によるお接待が行われます。点在する三十三観音に「南無大師遍照金剛」の文字が染め抜かれた五色の幟旗が立ち巡礼が賑やかに行われます。一か所に一つの観音さまだけではなく複数の観音さまが並んでいたりもします。島の一番北側には7つの観音地蔵さまが一行に並びその奥の中心的位置に観音堂があります。この観音堂には、赤と白の餅を搗いてお供えます。観音堂にお参りに来た人で女の子の子宝に恵まれない人は赤い餅、男の子の子宝に恵まれない人は白い餅を持ち帰る風習が残っています。欲張って2つ食べると流産してしまうそうです。

◆位牌を背負って盆踊り

塩飽諸島の本島・与島・櫃石島の盆踊りは、「新仏の位牌を背負って踊る」盆踊りを行っています。特に櫃石島と与島は、平成16年に文化庁より「記録作成等の措置を講ずべき無形の民族文化財」に選択されました。ほかに位牌を背負う盆踊りとしては、岡山県倉敷市下津井、広島県大崎上島、岩城島、愛媛県今治市大三島町野々江、松山市の怒和島の元怒和に伝わっていることが確認されています。位牌を背負う盆踊りの起源は明確ではありませんが数百年前からとされています。



盆踊り前にご詠歌で供養

毎年、8月14日に櫃石島と与島で盆踊りが行われます。与島の盆踊りは、休校中の与島中学校の校庭の中ほどに櫓を組み行われます。この櫓の上部から東側に棒が突き出しており、この棒に前年の8月以降に亡くなられた初盆の方たちの盆灯籠を吊るします。盆灯籠は「讃岐灯籠」とも呼ばれている白一色の紙製です。18:00から盆踊り前のご詠歌があげられます。僧侶はおらず島の大和講与島支部の女性だけで左手で金剛鈴を鳴らし、右手で鉦をたたきながら1時間ほどご詠歌をあげます。ご詠歌が終わると盆灯籠は残していよいよ盆踊りとなります。与島の盆踊りは「灯籠踊り」と言われて演目として8曲ほどありますが、現在では夜半までは踊らず供養が一通り終わった時点で終了しております。そのためでしょうか「灯籠踊り音頭」だけになっています。しかし、供養を音頭に取り入れた盆踊りは他の盆踊りには無い独特な味わいがあり歴史を感じさせられます。19



位牌を背負って盆踊り

時過ぎに何の前触れもなく櫓の上の歌い手がいきなり「灯籠盆踊り音頭」を歌いだしました。それにつられ自然と合の手が入り、力強く大太鼓が打ち鳴らされます。よくあるテープで音楽が流れるようなことはありません。歌と言っても仏教系の伝承唄「口説き」主流の供養唄です。それにつられて周りに集まってきていた方たちが徐々に盆踊りの輪を作り出します。踊りの輪の中に何人かは昨年夏以来に亡くなった新仏の位牌を布で包んで背中に背負い踊っています。時々近親者が交代しながら延々と踊り続けます。歌と合の手それに大太鼓の叩き手はうまく交代をして切れ間なく続きます。口説きの文句の合間に2種類の合の手「ヤレコラセー ヨイヤサノサー」と「ソレサー ドッコイセー」が交互に入ります。哀調をおびた音頭と太鼓にあわせ故人を偲びながら肅々と踊り明かします。

◆塩飽水軍を思わせる百々手祭り

「ももて」とは「百手」または「百々手」と書き、弓矢で的を射る悪魔払いの神事です。古くから全国各地で行われていましたが、近年ではその多くが廃れ、または内容を変えています。射る弓矢は、全部で約200本使用し「2本を1手」と数え200本で百手となります。本数はきっちり200本ではありませんが、たくさんの矢を射ることを「ももて」といわれています。馬上で射る「流鏝馬」と馬に乗らずに射つ「歩射」とありますが塩飽諸島の櫃石では歩射です。島ゆかりの大和武尊を祀っている王子神社で毎年1月に行われてい

る伝統の行事です。

櫃石島の「ももて祭り」は、約600年前(ハッキリとは判明してない)から続いているとも言われ昭和37年に香川県指定無形民俗文化財となっています。

小笠原古流の独特な作法にのっとり、「よーござる(よーござるかな)」のかけ声で神事が始まります。島中から選ばれた11人の袴姿の射手は、ベテランから大前(オオマエ)、関(セキ)、大前2番、関2番・・・と続き最後が中(シン)の順で約30m先の的めがけて「王子御神」などと島内の22神を唱



矢を射る寸前の手前の人は、古式にのっとり前屈みとなる。

えながら矢を放ちます。的は、一般的には「鬼の字を書いたもの」か「同心円」ですが櫃石の大的は珍しく白紙を貼り

墨で33個の黒点を書いたものです。黒点は、胎蔵曼荼羅を現しており、元は梵字を書いていたものが、今は黒い点となったとされています。祭りの最後には11人の射手全員で光明真言を唱えながら弓矢を持って島内を駆けめぐり、途中希望する家々の中も通り抜け厄払いを行います。

櫃石の百々手の【前屈みになる弓構え】は、舟の上から射ることを想定していることから塩飽水軍との関係が想像されます。



同じ境内で島の蔑竹を軸、松を矢尻にして矢作りをする

◆平家が残した岩黒島観音堂の秘仏

塩飽諸島の東に位置する岩黒島には、集落の小高いところに観音堂があります。島の人からは、病氣平癒に靈驗あらたかとして親しまれている十一面観音の銅像が祀られています。仏像の製作は、形式からみて藤原時代から鎌倉時代中期までとみられておりますが、年代は不明です。仏像は珍しい『掛け仏』の形式となっており、船に祀っていたと考えられています。仏像の発見は、寛政9年(1797)まで無人島であった岩黒島の



開墾に入った佐柳島(さなぎじま)の7人のうちの「紋次郎(紋治郎)」が振り下ろした鍬が何かにカチリと当たり、手で掘り返してみると真っ黒い土の塊から右肩が鍬で傷ついた観音さまの銅像がでてきたそうです。伝説によれば、「屋島の戦いで源氏に敗れた平家が長門に落ち延びていく途中に岩黒島で休もうとして上陸し島の中ほど清水で疲れを癒し、お礼にと観音さまをお祀りして去っていった。」とも云われ、戦で船を失った平家の武将が元の持ち主とされています。島には、この観音様にまつわる様々な伝説が残っております。毎年、旧暦の3月 17 日には秘仏のご本尊が開帳され、島外からのお詣りとお接待で賑わいます。



観音堂